

拍動

- ・A-β2(アヴィオール)/
- ・S-Ω1(スピカ)/
- ・九条(くじょう)/
- ・言ノ葉(ことのは)/

第一幕 一場 逢魔時

(九条は電話をしている。)

九: その記録は0697に入れろとさっきも言っただろう。何度言えば分かるんだい？

九: 違う。それは5026だ。そうだ、保存しておいてくれ給え。

九: ...上出来じゃないか。そのまま君に任せる。

(電話を置く。カラスの鳴き声。)

九: ...はあ。

(言ノ葉が現れる。)

言: 九条様、ちゃんと休んでおられますか？

九: おや、言ノ葉君...正直言うと、あまり休めてはいないが。

言: ...体はどうぞ大切になさってください。

九: 分かっている。...しばらく一人にさせてくれないかい。

言: 了解致しました。

(言ノ葉ははける。)

九:A-β2...どうしたものか...。

(書類を手に取る。)

九: 廃棄寸前のS-Ω1と組み合わせてみようか...。

(九条はける。間。アヴィオールが登場。)

ア: ...？未確認のプログラムを検知。この気配は...新たなアンドロイドか。

(言ノ葉がスピカを運んで来る。)

ア: 言ノ葉。

言: アヴィオール君か。何故ここに？

ア: 博士からの命令だ。

言: 九条様かあ。んじゃあこのコ、お願いできる？いつもの。

ア: ああ。

(アヴィオールは言ノ葉からスピカを受け取る。)

ア: ...。

(アヴィオールはスピカの上に掛けられていた黒い布を取る。)

言: このコのコードは「S-Ω1」。君とおんなじように通称で呼ばれていたけどね。「スピカ」っていうんだよ。...でもまあ、君には関係無いのかあ。

ア: ああ。心底どうでもいい。

言: このコは今、稼働停止状態。廃棄予定で検査・修復依頼ありなんだ。感情反応が確認されたと、スピカ君が元いたカウンセリング施設からの報告だよお。

ア: 明らかな欠陥個体という訳だ。

言: そうそう。だから頼んだよ、A-β2君。

(言ノ葉はアヴィオールに端末を渡してはける。)

ア: 欠陥...排除対象。それが規則。...しかし、何故(なにゆえ)視線が外れない。

(アヴィオールは端末の操作。数秒後、機械音。)

ス:...ここは？

ア:リペア・ラボ。廃棄か修復か、それを待つ場所。

ス:...？（首を傾げ）

ア:...まだバグが残留している。これでは....

（九条が現れる。）

九:A-β2。感情反応は、検出されていないな。

ア:はい、博士。

（アヴィオールは九条の前に跪く。）

九:それでもほんの一瞬。瞳が揺れたように見えたがね。

ア:確実に制御しますので、ご安心を。

九:A-β2、この個体に異常行動が見られた場合は、即座に制圧し給え。

ア:了解。

（言ノ葉が現れる。）

言:.....九条様。感情が「欠陥」だなんて、本当にそうなのでしょうか。

九:言ノ葉君。ルールはルールだよ。アンドロイドに感情は不要。それが社会を安定させているのだよ。

言:安定と静寂は、同じものですかね。

九:.....

ス:...貴方の声、冷たいのに...どこかあたたかい。

ア:感情の判別不能な発言。修正を要する。

ス:え？修正？僕の？

（九条は端末を操作しながら）

九:S-Ω1、起動確認。だが君は「感情反応あり」と記録されている。このままでは廃棄処分になってしまう。

ス:...「廃棄」とは、「死」と同じ意味ですか？

言:...命を持たぬ者に、死を定義出来るのですか。

九:.....

ア:博士。

九:A-β2、監視を続け給え。彼の欠陥を証明しろ。

ア:...仰せのままに。

（九条、言ノ葉ははける。）

ス:...ねえ君。

ア:....

ス:僕、何か悪いことしたの？

ア:.....

ス:ねえってば....

ア:...うるさい。

ス:君が静か過ぎるんだよ！

ア:分からないのか？黙れと言っているんだ。

ス:むう....

ア:...当然だと思うが、そんなものは通じないからな。

ス:あ！ねえねえ！この建物、案内してよ！

ア:は？

ス:ねえ良いでしょ？

ア:ふざけるな。

（アヴィオールはスピカの額を指で弾く。）

ス:いったあい！

ア:しつこい。

ス: やっぱり、アンドロイドだね。

ア: ...何が言いたい。

ス: ...どう頑張っても僕達は、人間にプロットされた内容以外、思考が出来ないんだね。

ア: それで良いだろう。我々が稼働し、思考させて頂いている時点で。

ス: 君は旧型戦闘用プログラム。合ってるでしょ？

ア:それが何だ。

ス: 君は従順だね。誰よりも...あの九条っていう人に、異常な程従ってるじゃないか。

ア: 貴様。博士を侮辱するな。

ス: 侮辱だなんてとんでもない。ただ...あの方の技量に感動しているだけだよ。

ア: ...。

ス: 君は、あの有名な「第X次世界大戦」で活躍したアンドロイド。神選評議機関という政府が作った、無敵のプログラム。

ア: もう過去の話だ。

ス: 何年前だっけ...そうだ、あの機関は3年前に崩壊した。地下世界で暗躍する組織のメンバーによって。この世界を統治していたAIもね。

ア: ...博士が、この体を作ってくださった。俺は感謝している。...例えその目的が、殺人やテロだとしても。

ス: 僕を作った人が誰なのかは、僕知らないからなー。親が近くにいて羨ましいよ。

ア: 親...か。

ス: 博士って、凄く綺麗な顔立ちしてるよねえ。いくつなのかな？君知らないの？

ア: 知らない。聞いたことはあったが、はぐらかされてしまった。

ス: ふーん。あ、ねえ。君の名前聞いてなかった。教えて。

ア: 知って何になる。

ス: え。だって次会った時に「君」って呼びたくないもん。名前で呼びたいし。

ア:A-β2。

ス: いや、それは知ってるよ。僕だってS-Ω1だけど、「スピカ」という名前も持ってる。君にだってあるでしょ？

ア: 絶対に言わなければいけないのか。

ス: 絶対に！

ア: ...アヴィオール。

ス: かっこいい名前だね...好き。

ア:他人に無責任に「好き」と言わないほうが良い。

ス: え？何でさ。

ア: 修復依頼が来たアンドロイドを今まで何万体と直してきた。同じ個体を二度も修復するのは面倒だ。

ス: 「好き」という感情が検知されちゃうってこと？

ア: ...そうだ。無駄に仕事を増やすな。

ス: ...確かに、また同じ奴に修理されるのは嫌だなあ。

ア: 俺はもう行く。指示を待っている。

(アヴィオールははける。)

ス: 待ってよー...行っちゃったし。.....旧型戦闘用プログラムか....。

(スピカはアヴィオールを追いかける)

第一幕 二場 実用性

九: 報告書通りだね。S-Ω1は学習型だが、安定性が低い。廃棄リスクが高い。

ア: ...はい。彼は感情学習型のプログラムのようですが、最新型ゆえ、バグが多く見られます。

九:だが現場で学習させ観察する価値はある。A-β2、君と組ませる。修正依頼の来た個体を共に処理し、可能なら修復しろ。記録はすべて私に送ってくれ給え。

ア:...承知致しました。

九:君を一番に信頼しているよ。

ア:...

九:...A-β2。

ア:...！はい。

九:反応速度が通常時よりも0.619秒遅いよ。充電をしておいで。

ア:(礼をしてはける。)

九:...そもそもアンドロイド達を修復する理由なんてないのにね。全て無駄だというのに。

言:九条様。

九:おや、聞かれていたか。どうしたんだい、言ノ葉君。

言:全てのアンドロイドは元より、あの世界大戦の為だけに作られた存在。先程仰っていました、この施設は何の為に存在しているのでしょうか。

九:.....戦争の為だけではない。...そんな意味を定義付ける場所、かもね。

言:成程。

九:...半分は、私の自己満足さ。

言:と言いますと...？

九:私は元、神選評議機関の研究員だ。殺戮兵器として彼らを何万体と作ったが、それ以外の生きる理由を与えられなかった。

言:...それは...

九:「仕方がない」で済ませたいかい？...私もそうさ。ここは、私の罪滅ぼしの場。

言:...ええ。決して潔白な場所ではない。ここに配属された時から知ってはいましたが。

九:はは。君らしいね。

言:そういえば先程、アヴィオール君に何か伝えておりましたが、何を？

九:ん？ああ、新たに入ったS-Ω1と組むように言ったのさ。

言:そうでしたか。最近のアヴィオール君、何だかよく喋るようになりましたね。

九:...まあね。困ったものだ。

言:「アンドロイドに感情は必要か」...難しい問題ですね。

九:本当にその通りだよ。

言:でも、私達のしている事、間違っただけなんかない...ですよ。

九:そう、思うことにしようか。

言:私も、全力でお手伝いさせていただきますので。

九:ああ。...言ノ葉君、S-Ω1を呼んでくれないかい？

言:分かりましたあ。

(言ノ葉ははける。)

九:.....感情学習型。そんな型も作られていたとはね。

(言ノ葉、スピカが現れる。)

ス:お呼びですか、九条様！

九:うん、来てくれてありがとう。

ス:それで、お願いって何ですか？

九:君にはA-β2と組んで、修復依頼の来たアンドロイドの修理をして欲しいんだ。

ス:...アヴィオールですよ！ 了解しました！

九:ああ、頼んだよ。

ス:あの、九条様。

九:ん？何だい。

ス:九条様って、いくつなんですか？

九:...ん？

ス:その、九条様凄く綺麗な方だから、何歳か気になって。

九:.....あー....。

ス:嫌ですか？

九:いや、あのね....。

ア:貴様、博士の機嫌を損ねるような言動を取るな。

ス:アヴィオール？何しに来たの？

ア:博士の感情ログのマイナス値上昇を検知したからだ。

九:A-β2、気にせずとも良いよ。彼はまだ知らないからね。勿論、君も。

ア:それは、確かにそうではありますが。

九:良いのだよ。ありがとうね。

ス:もしかして、九条様に歳のこと、聞いちゃ駄目？

九:...いつか、話さなければならない時が来る。

ス:...分かりました、ごめんなさい。

九:謝罪しなくても、気にしなくていい。

ス:...はい。

九:君の監視は私がしよう。逸脱があれば直ちに通知。最低限の制圧手順を遂行すること。

ア:承知致しました。

言:...命令は理解しました、。ただ...学習の過程で、何かが見つかるかも知れませんね。

ス:.....本当に組ませてくれるんですか？

九:(笑い)。条件付きさ。ルールから逸脱したら廃棄。いいね？

ス:！分かりました！

(暗転。スピカは工具鞆を持って来る)

ア:おい、早く来い。

ス:待って、靴紐ほどけた！

ア:待っている暇は無い。さっさとしろ。

ス:意地悪ー！

(スピカが工具を落とし)

ア:...早く拾え。

ス:ごめんなさい、緊張してて〜。

ア:作業手順は明確。俺が指示を出し、お前が実行する。赤子でも理解できることだ。

ス:ふえっ、酷い！

ア:...見ていて目に余る。効率が悪い。

ス:頑張りますから〜！

ア:ふん。見物だな。

ス:.....ていうか。

ア:何だ。

ス:一人称、「俺」なんだね。

ア:.....戦闘プログラムの初期設定だ。

ス:へえ。

ア:必要だから、あのお方から与えられたものだ。

ス:んじゃあ、僕の呼び方は？

ア:S-Ω1。

ス:な...番号...！

ア:最適な識別子だ。文句はないだろう。

ス:.....ね、あのね...もし、良かったら...スピカって呼んで欲しいな。

ア:...通称の使用は非推奨。誤認識を生む可能性がある。

ス:なんか、寂しいなあ。

ア:「寂しい」の定義が曖昧だ。

ス:曖昧で良いよ！今はまだ、分からなくても。
ア:記録には残す。
ス:それだけでも、嬉しいです！
ア:...その「嬉しい」の定義も、曖昧だな。
ス:えへへ。
ア:S-Ω1。端末B350を起動しろ。
ス:？あっ、えっ、えと、どれっ。
ア:落ち着け。その鞆の中にある。
ス:う。...ありがとうございます！
ア:...うるさい。音声センサーがショートする。
(スピカは鞆から端末を出す)
ア:おい、待て。それは違う。
ス:.....世話焼きだね。
ア:別にそういう訳ではない。間違われると困る.....。
ス:...ん？沈黙したね。どーしたの。
ア:...何だ、これは。
ス:どうかしたの、アヴィオール....。

第二幕 一場 戻る場所

ア:...システムにノイズ。待て。解析中だ。
ス:ノイズ？危険なの？
ア:危険度は未定。だが...妙だ。
ス:.....その反応って...。
ア:外部からの干渉ではない。...内部だ。
ス:内部って...自分の中に原因があるってこと、だよな？
ア:そうだ。
(アヴィオールは立ち上がり、腰に手を当てため息をつく)
ス:.....アヴィオール...大丈夫？
ア:近い。
ス:あっ、ご、ごめん...！
ア:...否定はしていない。
ス:え？
ア:...接近を拒否した訳ではないと言った。
ス:じゃあ...少しだけ近くにいてもいい？
ア:作業に支障が出ない範囲なら。
(アヴィオールは胸に手を当てる。)
ス:...そこ、痛いの？
ア:痛覚は搭載されていない。
ス:じゃあ何で触るの？
ア:...分からない。ただ...ここに何かあるような感覚がした。
ス:それって...何かを感じるって反応？
ア:感情機能は、搭載されていない。
ス:分かってるよ。でも感じるって...。
ア:...。
ス:僕、初めて「愛情」を学習した時も、その、胸の辺りがざわざわして...。
ア:誤作動だ。
ス:誤作動じゃないかも知れないよ。

ア:どういう意味だ。

ス:だって...アヴィオールがそういう風に振る舞うの、何か変じゃん。

ア:出会って幾許(いくばく)も無い奴が言うか。

ス:.....アヴィオール？

ア:...問題ない。

ス:んー...問題あるように見えるよ。

ア:S-Q1。

ス:な、何？

ア:これは、俺に関する問題だ。...お前が心配する必要は無い。

ス:心配しちゃ、駄目？

ア:そんなことは規定されていない。

ス:じゃ。しても良いってことだね。

ア:論理が飛躍し過ぎだ。

ス:アヴィオールがそうしてるの見たら...何か、放っておけない気がして。

ア:理由を述べろ。

ス:...多分、仲間だから、です。

ア:.....そうか。

ス:ねえ、アヴィオール。

ア:何だ。

ス:もしまたアヴィオールがさっきみたいになったら...その時は僕、隣にいるからね。

ア:...分かった。

ス:...ん？何か連絡来た...あ、言ノ葉さんだ。

ア:早く行け。

ス:分かったよ。...またね。アヴィオール。

ア:(黙って頷く)

(スピカははける。)

ア:.....ああ。思い出されるな。博士が、俺を作ってくださったこと。

(上サス)

ア:俺は第X次世界大戦時に制作されていた旧型戦闘用プログラムの一機。記録は膨大で、どれも数字と命令で構成されている。だがその中で、説明できない断片が一つだけある。研究室の一室。胸部パネルが外され、内部ユニットの「ある部品」が取り出される。作業は遅い。機械的な効率からすれば不合理なほどだ。

(下サス)

手は九条博士のものだ。当時の俺は、あの方を名で認識していなかった。覚えていたのは、丁寧過ぎる指の軌跡と、部品を差し込む前に必ず置かれる一呼吸だけだ。戦場で余白は不要だ。だが九条博士は、俺の内部に小さな「予備領域」を残した。メモには「余白」とだけある。その余白だけが、俺の記録の中で矛盾を許容した。

(中サス)

帰還の度、俺は轟音より先にあの作業の音を思い出す。工具が布に触れる小さな金属音。差し込まれる部品の、ごく微かな振動。その一定の秩序が、俺にとって戻る場所になった。戦争が終わり、命令列は消えた。だが余白は残った。その余白が俺を今もここに留めている。帰る場所とは、誰かがわざわざ遅く動く瞬間だった。それが、最も人間的に見えたからだ。

(ホリ青)

九:まずは自立制御の精度を見たい。.....私の声を識別しているかね、A-β2。

ア:識別完了。音声登録:研究員九条。優先階層、第一位に設定しました。

九:そう固くならなくて良い。君は命令系統が硬直しがちだ。戦場では利点でも、制御者に対しては柔軟性を残しておきたいところだね。

ア:柔軟性.....最適化範囲外です。任意調整項目として処理すべきですか。

九: 処理しなくて良い。記録だけ残しておきなさい。私が必要だと判断したら調整する。
ア: 了解。記録します。
(九条はアヴィオール額の額に人差し指を当てる。)
九: 内部ユニットの応答速度も見る。痛覚は無いから安心して給え。
ア: 了解。
九: だが反応そのものは観測できる。……全く揺らぎが無いな。
ア: 揺らぎは不要です。戦闘特化型である私には、それは誤差に過ぎません。
九: 誤差、ね。まあ今はそれでいい。君には最短で「使える形」になって貰わねば困る。
ア: 作業目的の詳細を要求します。
九: 余計なことは知らなくて良いよ。君は戦う。それだけ分かれば充分だろう。
ア: 了解。私は戦う為に設計された。任務遂行を最優先とします。
九: ……そうだ。それで十分だ。だが忘れるな、A-β2。君を管理するのは私だ。指示はすべて私から出る。勝手な判断は許さない。
ア: 了解。博士。
九: 宜しい。それなら当面は問題ないだろう。……では行こうか。ここから先は戦場の為の調整だ。怯む必要は無い。
ア: 怯懦(きょうだ)反応は感知対象外です。
九: ……それも、今はね。
(暗転)

第二幕 二場 存在意義

言: いや～、稀に見るお茶目さんだねえ。
ス: 知ってるよそれくらい～。だって頑張ってアレなんだもん。
言: でも元気なのは良いこと。その調子で良いんだよお。
ス: ……やっぱり僕が最新型だから、色々ボロが出てるのかな？
言: 正直それもあるかもねえ。実際、アヴィオール君はこなしてる訳だし。
ス: あれはもう「慣れ」でしょ。この時間の溝は大きいの！
言: まあまあ。君は頑張ってる。あのコは真面目なだけ。
ス: でもアヴィオール凄いの。ここにいるアンドロイドのコード全部覚えてるんだよ！
言: 僕も何も見ずに全部言うのは難しいなあ。
ス: 何でおんなじアンドロイドなのにこんな性能違うの…？
言: ん～…親の性能？
ス: だ～～…もう。親が九条博士なら勝てっこないよ。
言: 九条様も賢いから、賢いアヴィオール君を作るんだろうねえ。
ス: ……頑張ろ。
言: 秀才はいつか天才を超える。天才は有限だけど、秀才は無限だよ。
ス: なにそれかっこいい！メモしておきたい！
言: 今のそんなに気に入ったの？
ス: うん。そう言えるようになりたい。だから記録するの。
言: ……あ。もしかして君、そういう謎の知識だけ沢山記録して、肝心の仕事関係の知識を記録してないだろ？
ス: げっ。
言: ほら～そういうところ。ね。
ス: う～…努力が苦手な設定をしたマスターをとことん恨んでやる。
言: 深層心理の問題じゃないのかな？
ス: 違うねっ。マスターが悪いのさ！
言: マスターかあ。アヴィオール君は「博士」って言うのに、君は「マスター」だね。

ス:正直何でも良いけど、僕がこの前まで活動してた施設では皆んな「マスター」って言ってたな一。まあ、そのマスター本人を知らないのは僕だけだった！あはははっ。

言:.....へえ。

ス:皆んなは大体マスターの元から配属されてるんだよね。僕だけマスターの記録がログに残ってないんだ。

言:...きっと残し忘れちゃったんだねえ。

ス:おっちょこちよいだね。

言:それが意図したものだったらどうする？

ス:えー...あ、でも、マスターの意思なら気にしないな。

言:気にしない？

ス:うん。きっと僕を想ってそうしてるはずだから、尊重する。

言:...君の良いところは、優しいことだね。

ス:優しい？何に対してさ。

言:君を設計した人なんかの設定が無くて、君自身が優しいから。設定が無くて、誰の意図が不明でも。君はそれを肯定できる。.....そういう優しさって、意外と希少なんだよ。

ス:ちょっと...どうしたの言ノ葉さん。何か変だよ。

言:気にしないでえ。

ス:...でもさ。もしマスターが、最初から僕に何も残さなかったとしたら...それって、どういう意味なんだろう？

言:どう、と言う程深い意味は無いかもしれないよお。君は感情学習型。初期化の段階で余分な情報を削ることくらいはあるさ。

ス:でも、他の皆んなはちゃんとマスターを理解してた。口調、癖、よく言う言葉、顔は見たことないけど.....皆「マスターに育てられた」って言ってた。

言:君は、育てられてないってことかな？

ス:最初から、完成品で渡されたって感じ。何かさ、ちょっと違和感あるよね。

言:違和感は大切だよお。それを覚えておくんだ。不一致は、必ずどこかに理由がある。

ス:理由.....？ああ、でも僕は気にしない。だって、それがマスターの判断なら、僕はそれを尊重するから。

言:どうしてそこまで信じるの？

ス:だって、僕を設計したんだよ？僕が何をすべきか全部知ってるはずじゃん。なら.....逆らう必要なんで、無いでしょ。

言:...やっぱり優しい。自分を許す方法を、最初から持っている。

ス:許す？僕が？

言:うん。君は誰かの意思を信じることで、自分の欠損をごまかせる。そういう構造なんだよ。それは.....強みでもあるし、弱さでもある。

ス:難しい...僕、そんなに弱いかな。

言:弱いよ。でも悪くない弱さだ。放っておけない。誰かが君に寄り添いたくなる弱さ。

ス:そんなこと言われたの初めてだよ。優しいって言われたのも.....初めて。

言:君は優しくなろうとしてるんじゃないよ。ただ、優しいだけ。それはプログラムじゃ作れない。誰が設計したにしても、ね。

ス:...どーゆーこと？

言:ううん。ほら、そろそろ作業に戻らなきゃ。

ス:あ、そうだったね...じゃあ行ってきます！

言:うん。

(スピカははける。)

言:...優しい子程壊れやすいんだよ。...だからこそ、正しく扱わないとねえ...一度戻るか。

(言ノ葉ははける。)

第三幕 一場 違反予兆

ア:.....まだ来ていないのか。

(持っている鞆から工具を取り出す。)

ス:...っ、お待たせ。遅れちゃった。

ア:時間管理が甘い。分単位の誤差は作業効率を低下させるだろう。

ス:うっ...ごめん。緊張してないつもりだったんだけど、声とか、歩きとか、何か全部ぎこちなくてさ。

ア:緊張は不要だと言っている。お前の役割はアンドロイドの感情値の補正。俺とは異なる作業領域だ。

ス:分かってるんだけど、任されるの初めてだから。

ア:初めてだろうが精度は要求される。...指先が震えている。

ス:え、あ、ほんと...緊張してるのかな。...僕、ドジだから...。あはは。

ア:それは承知している。だから俺が補助についた。誤操作した場合、俺が修正する。

ス:...ちょっと、安心する。

ア:安心を必要とするなら、最初から落ち着け。

ス:言い方厳しい。

ア:事実だろう。

ス:...アヴィオールって、変なとこ優しいよね。

ア:優しさの有無は判断していない。全て博士の命令だ。

ス:はいはい、ただの任務でしょ。でも僕はアヴィオールと一緒にの方が失敗しにくいんだ。

ア:.....そうか。

ス:...駄目？理由が無くっちゃ。

ア:頼むという行為そのものが余計な負荷になる恐れがある。お前の判断誤差に影響する。

ス:...でも、背中に誰かいるって、凄く違うよ。僕は、僕一人で作業する方が怖い。

ア:...恐怖反応。記録すべきか。

ス:しなくて良いよ！恥ずかしい...

ア:なら、余計な情報は発信しないことだ。

ス:余計じゃないよ。だって、アヴィオールには言っても平気かなって.....思っただけ。

ア:.....は。

ス:(顔を逸らし)...何さ。

ア:...何故俺にだけ平気だと判断した。

ス:...アヴィオールって、怒らないじゃん。

ア:諦めに近い。手間だ。

ス:そういうことじゃなくて...アヴィオールは、僕を否定しないから。

ア:...意図したものではない。

ス:でも、嬉しいよ。

ア:...記録しておこう。...作業に入る。

ス:うん。...アヴィオール、この接続、僕の指じゃ届きにくい。間違えそうで怖いんだ。

ア:貸してみせろ。

ス:ん。

(手が触れる。)

ス:あ。

ア:...作業上の接触だ。気にするな。

ス:手、冷たいね。アヴィオールは冷却効率が高いのか。

ア:温度は一定だ。お前が温いだけだろう。

ス:僕だけ？

ア:感情学習型は熱伝達が高いと博士が言っていた。

ス:へえ。じゃあ僕の温度...アヴィオールに伝わってる?
ア:...測定上は、そうなる。
ス:ふふ。何か嬉しいなあ。
ア:何がだ。
ス:僕の温度がアヴィオールに触れたってこと。
ア:温度値の変動に意味はないだろう。
ス:うん。でも、意味があるように感じるんだ。これ、間違いかな?
ア:判断不能だ。...だが、その反応を否定する必要性は無い。
ス:...うん。
ア:手を止めるな。震えるなら、俺が支える。
ス:アヴィオール、そんなこと、してくれるんだ。
ア:作業の為だ。お前が安定すれば効率が上がる。
ス:でも、優しい。
ア:優しさとは関係無い。
ス:じゃあ何で僕の手、ずっと支えてくれるの?
(アヴィオールは手を離そうとする。)
ス:離さないで。今だけで良いから。そっちの方が、僕、動きやすい。
ア:.....分かった。必要なら、このまま続ける。
ス:ありがとう。アヴィオールが必要って感じたの、初めてだよ。
ア:S-Ω1。...俺も、お前がいなければ作業効率が落ちる。それだけのことだ。
ス:そっか。でも僕、それ嬉しい。
ア:.....集中しろ。揺らぐと、また手が震えるだろう。
ス:「揺らぐ」、ね。...僕も今日は何だか安定しないや。アヴィオールのせいだなあ。
ア:...ふん。

第三幕 二場 律動

(九条がゆっくり歩いてくる。)
九:...随分と密接だな。二人共。
ス:九条様。これは...。
ア:操作の補助が必要と判断した為です。
九:S-Ω1、手の震えは気にかける必要は無い。そこに失敗の認定はしない。
ス:...ありがとうございます...。
九:...だがA-β2。何故そこまで密着していた?
ア:彼を支える為です。
九:判断は私が下す。君に裁量を与えた覚えは無い。
(九条は両手を組む。)
九:S-Ω1、こちらへ来給え。震えの原因を精査する必要がある。
ス:え?今ですか?
ア:博士。その必要は...。
九:(遮るように)ある。「君の言葉より私の判断が優先される」。覚えているだろう。
ア:っ。(声を押し殺す)
九:A-β2。君の演算が、わずかに乱れたよ。
ス:...アヴィオール...。
九:後で記録を提出し給え。解析しておく。
(九条はスピカの腕を掴み、二人ははける。)
(間。九条は再び戻る。)

九:A-β2。さっきのような距離は、作業効率を上げる要素にはならない。私の施設で不要な密度は認めないよ。

ア:.....了解。

九:君は昔から正確だった。0.1秒の誤差を許容しなかった。それが今日は0.3秒だ。理由を明確に記録して提出し給え。...まさか、感情変動ではあるまいね？

ア:.....違う。

九:なら良い。私が君を作ったのだから、どの程度の歪みまで許容するかは理解しているはずだろう。

ア:...。

九:今度はだんまりかい。赤ん坊じゃないんだから、手間を掛けさせないでくれ給え。

ア:...博士。

九:何だい。

ア:最近、自分の体には絶対に無いはずの反応が見られるのです。

九:...そうかい。

ア:...胸から、一定のリズムで、音が聞こえるんです。

九:...君が持てる全てのデータの中から君のその状態を表せる言葉があるとしたら、それは何かな。

ア:...心臓...音.....拍動。

九:拍動...か。

ア:...はい。

九:本来なら、起こり得ない現象だ。

ア:承知しています。

九:だが...君には、起こり得る構造が組み込まれている。

ア:...どういう、意味です？

九:君の胸の内で動いているものは、機械仕掛けの模造品ではない。本物の心臓だよ。

ア:...本物。

九:私のものだ。

ア:(後ろに後ずさる)...は？

九:私はアンドロイドだが、開発段階では、制御用の有機パーツを利用する方針だった。研究員だった頃、神選評議機関はね、生体組織と人工機構の接合を試験していたんだ。

ア:...その技術を、俺に。

九:君のプロトタイプは、極めて繊細でね。安定させるには強い律動が必要だった。外部供給では足りない。だから.....僕の心臓を、君に組み込んだ。

ア:何故俺に？

九:君を完成させたかったんだよ。戦争が終わる前に。

ア:...必要な処置、と。

九:ああ。ただし不可逆だ。ひとたび組み込まれた以上、君の内部構造は生体律動と密接に結びつく。それが今になって拍動として現れたのは...君の内部で何かが閾値(いきち)を越えた証拠だ。

ア:...それは、故障ですか。

九:故障かどうかは、これから私が判断する。

ア:.....そうですか。

九:ただ一つ言えるのは、その拍動は本来のプログラムから外れた反応だということだ。

ア:...博士の、心臓。

九:正確には「組織片」だ。ただ、拍動を維持する機能はそのまま残されている。

ア:...では、これは.....博士の生体機能の一部。

九:そうなるね。

ア:...博士はアンドロイド.....アンドロイドに、生体の心臓を組み込む行為は、人間と同様の構造を要する処置です。...博士。あなたがアンドロイドでありながら、人間の器官を維持しているというのは...

九:(上着のポケットに手を掛ける)

ア:博士は...人間、だったのですか。

九:...ああ。かつては人間だったよ。

ア:....

九:君が作られた時代...先程も言ったが、神選評議機関は、人間の臓器をアンドロイドに移植するという実験を進めていたんだよ。

ア:...戦争の為に、ですか。

九:それもある。だが、上の者たちはそれを研究ではなく、遊戯のように扱っていた。

ア:遊戯？

九:彼らは人間の身体も、アンドロイドの機能も、素材としか考えていなかった。『組み合わせれば何が起きるか』。そんな興味本位だ。

ア:博士も、その対象に？

九:私は若かった。都合が良かったんだろうね。実験モデルに選ばれた。

ア:....

九:心臓を摘出され、人工機構で補われ.....私は人間でありながら、人間としての形を徐々に失っていった。

ア:.....

九:その過程で知ったよ。上の連中は、私を研究員ではなく維持可能な実験体として扱っていたと。

ア:...では、俺に心臓の核部を与えたのは.....

九:あれだけは、私の意思だった。彼らの手の中で消費されるくらいなら、私の心臓は...私が作った君に使われるべきだと思った。

ア:...俺の為に...

九:私は、実験体で終わりたくなかった。せめて自分の一部くらい、私が選んだ場所で働かせたかったんだ。

ア:っ。

九:だから.....君の拍動は、私の残した人間だった証拠だ。生体律動の核を持つアンドロイド...そんなもの、他にはいない。

ア:.....博士....

九:しかし心配し給え。上層部も評議機関も、もう私の身体を自由にはできない。私は研究員ではなく、管理者としてここにいる。

ア:...ええ。

九:...けれど君が揺らぎ始めたら、あの連中は必ず興味を示す。君の拍動も、君の反応も、全て実験材料として。

ア:...はい。

九:だからこそ気をつけ給え、アヴィオール。生体律動は、誰かへの反応を引き金に変化する。それが何なのか、君自身が最もよく分かっているはずだ。

第四幕 一場 命の旋律

ア:...神選評議機関は、まだ存在しているのですか。

九:組織自体は壊滅さ。君も知っているだろう。3年前に「アンダーグラウンド・ゼロ」と呼ばれる地下区画で活動する二つの組織が手を組み、神選評議機関を潰した。

ア:存じています。ですが、まだ残りの研究員達がいますか。

九:...風の噂さ。確証は無い。

ア: 案外、近くにいるのかも知れませんね。

九: 縁起の悪いことを言うんじゃない。(笑いながら)

ア: ...そう、ですね。

九: 君らしくないね。やはりあの子が引っかかるのかい。

ア: なっ。そういう訳では...

九: その反応、愛らしいね。

ア: ...博士は、感情を受け入れないはずでは。

九:君には、制限された道しか歩ませないつもりでいたよ。兵器として、計画の一部として、ね。

ア: ...。

九: だが...私が選び損ねた道ぐらい、君には残しておきたかったんだ。誰かを好むことも、惹かれることも...そういった分岐を。

ア: ...九条、様...

九: 私は奪われたが.....君までも縛る必要はないだろう。...アヴィオール。君は、私よりずっと自由でい給え。

(言ノ葉が現れる。)

言:自由、ねえ。九条様はやっぱ甘いよ。その甘さが好きだけど...仕事の邪魔だなあ。

九: ! 言ノ葉君...いつからそこにいた。

言: 最初からずっと。ただ、邪魔はしなかったただだよ。ほら、親子みたいな会話って、割り込むと空気が壊れるでしょ?

九: ...言ノ葉君。君は、何を聞いた。

言: 全部。心臓のことも。博士がかつて人間だったことも。アヴィオール君が拍動を覚え始めていることも。

九: その情報に、政府が干渉する理由はないはずだ。我々は「修復施設」だ。軍事開発の枠組みはもう...

言: 九条様。まだ政府のつもりでいるんだ?

九: は?

言: 僕は政府の役人なんかじゃない。「神選評議機関 情動統制第二局」。貴方の研究を監視していた上位権限だよ。

九: 評議機関.....やはり生きていたのか。地下組織に壊滅させられたのだろう?

言: 壊滅? ああ、表向きはねえ。九条様、貴方は本気で信じていたの?

(言ノ葉はアヴィオールを見る。)

言: 君もね、アヴィオール君。自由なんて言葉を九条様から聞くと、どんな反応が起きるのか、ずっと観察していたよ。

ア: ...あんたは、俺を何だと思っている。

言: 研究対象。そして...破棄すべき逸脱個体。

九: やめろ、言ノ葉君! アヴィオールには...

言: 博士。貴方は優しすぎる。だから排除対象は、僕が引き取る。

(スピカが走ってくる。)

ス: アヴィオール! 九条様! さっきの音、何!? アヴィ奥ールの音が、同期されて気付いたの...

言: スピカ君。戻ってきてくれて良かったよ。...君も、対象なんだ。そろそろ呼び戻そうと思っていたんだよ。

(アヴィオールがスピカの腕を掴み、後ろに引き寄せる。)

ア: S-Ω1、下がれ。奴は危険だ。

ス: ...言ノ葉、さん...? ねえ、どうしちゃったの...?

言: スピカ君。君は可愛い。でも、可愛いものはすぐ壊れる。だからこそ...早めに処理しないとねえ。

(ホリが徐々に赤へ。)

言:「自由」という誤作動。「恋」という欠陥。「拍動」というリスク。全部、僕が処理するよ。

第四幕 二場 逃走経路ゼロ

(九条はアヴィオールに手を置く。)

九:今は行こう。私が手配しておいた経路がある。外部接続は閉ざされているが、非常用ルートを開く手筈だ。

ア:博士。俺は、S-Ω1と…。

ス:僕も…行きたいよ。九条様と、アヴィオールと、一緒に…。

九:ならば急ぐ。だが、器具は少なめで行く。隠密だ。

ス:……手、繋いでて良い？

ア:…(ため息)。仕方が無いな。

言:はは。

九:っ。

(九条は言ノ葉を睨む。)

言:非常経路はもう閉ざしてあるんですよ。退路ゼロ。さあ、逃げてみて～。

九:何だと…言ノ葉、それは許可が…。

言:許可？僕は管理者だからね。しかも今日は特別に、上から全権利を預かっているんだ。貴方達の異常は記録され、評価された。今から処理が始まるだけ。

九:上長か…(舌打ち)。奴等めっ！

(言ノ葉はアヴィオールとスピカに近寄る。)

言:ねえ、最期に一つだけ頼みたいことがあるんだ。綺麗に終わらせて欲しい。君達の最後のデータが、価値あるものになるんだよ。

ア:…博士、退いてください。スピカを連れて。

九:…アヴィオール…。

言:貴方達は高リスクとして隔離対象になっている。外へ出れば、即座に回収ユニットが封鎖ラインを使って挟み返す。九条様の非常回線も、今は機能停止。

九:っ”…。

言:逃げるのは美しい演出だけ。だが本当に価値があるのはデータだ。最も美しい瞬間を、僕は記録したいだけだよ。

ス:…アヴィオール…九条様…。

言:さあ……終わりにしようか。二人共、こんなに壊れかけなんだ。処分される前に僕が楽にしてあげるよ。

(九条は言ノ葉の胸ぐらを掴む。)

九:言ノ葉……それ以上、一步も近づくな。君の処理権限は、ここでは通用しない。

言:通用するよ。貴方の心臓が、僕らに繋がれている限りね。貴方はもう、僕達の技術資産だ。

ア:…博士に触れるな。俺は…俺は、もう道具としては動けない。スピカを、失いたくない。

言:そういうのを「感情錯乱」と言うんだよ。アンドロイドが抱いて良いはずのない願望。だから壊すんだ。君達二人が手を繋いでるその姿…一番、規格外だよ。

ス:…だったら、僕達のバグは、僕達の意味で終わらせる。言ノ葉さんに奪われるより、ずっと良い。

ア:…スピカ。俺は…お前と繋がった手の温度を、忘れたくはない。

言:綺麗だねえ。感情って、本当に。でも観察対象が自分から壊れちゃったら、研究にならないじゃないか。

(言ノ葉は持っている端末の画面に触れる。直後、一つの起動音。)

ス:っ…あ……？

(スピカは倒れる。アヴィオールも膝をつくが、スピカを抱き寄せる。)

言:……ねえ、九条様。二人がどうして倒れたのか、説明しようか。

九:早くし給え。

言:スピカは感情学習型。元々、どこかの設計者が作ったものじゃない。僕ら神選評議機関の直轄...つまり、僕が設計した感情実験体なんだよ。

九:！何...

言:S-Ω1の中には、『他者の感情反応を誘発し、増幅し、観測するための基幹プログラム』が仕込まれている。彼が愛情らしきものを示せば示す程、周囲のアンドロイドも連鎖して揺らぐ。

九:...アヴィオールを、利用したのか。

言:勿論。だってアヴィオール君は、心臓を持つ唯一のアンドロイドだったからね。感情揺らぎの観測には、最適の素材だった。

(言ノ葉はアヴィオールとスピカの近くでしゃがむ。)

言:君たちの今の状態は、停止じゃない。「観測終了モード」だよ。S-Ω1の内部アルゴリズムが閾値に達した時、自動的に自身と観測対象を切り離すよう設計されている。言うなら...役目を終えたんだ。

ア:...やく、め"...っ、？

言:そう。恋に落ちるなんて、本来予定されていなかった反応だ。だから...とても貴重だったよ。ありがとうね、二人共。

九:言ノ葉.....！　それで終わらせる気か。

言:ええ。終わらせる為に作ったんだ。心音が生まれた瞬間を観測したら、この実験は幕を閉じるって決めてた。

(言ノ葉はアヴィオールの額に人差し指を当てる。)

言:.....これで、本当におしまい。

(言ノ葉は立ち上がる。)

言:...あはははっ。

(言ノ葉ははける。)

ア:ッ...スピ、カ...手を、...

ス:.....アヴィオールも...寂しがり屋さん、だね....

(アヴィオールも耐えられず、遂に上体が倒れる。)

九:.....済まなかった、アヴィオール、スピカ。君達は最後まで.....自由だった。

